



9784750321615



1920037025007

ISBN4-7503-2161-3

C0037 ¥2500E

定価(本体2,500円+税)

日韓交流授業と社会科教育

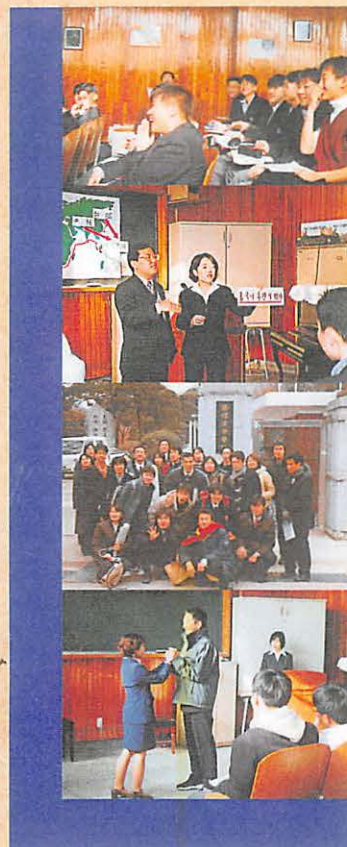
谷川彰英〔編著〕

明石書店

日韓交流授業と 社会科教育

谷川彰英〔編著〕

明石書店



日韓相互理解教育の新たな課題 ——韓国青少年への継続調査を手がかりに——

馬居政幸（静岡大学）

1. 10年間の調査結果から

1990年代初め、私は韓国地方都市の小さな書店に入って驚いた。輸入が禁止されているはずの日本の漫画が壁一面に並んでいたからである。そのとき以来、日本文化を受け入れる韓国の子どもたちの変化を追い続けてきた。特に、谷川先生が大学院生とともに韓国の高校で授業を開始した年と同じ1995年から、李明熙氏を始めとする韓国の友人に支えられながら、同一質問による調査を10年間にわたり実施してきた。その間に、1997年末経済危機とその克服のために翌年誕生した金大^{キム デ ジュン}中大統領による日本文化開放とIT産業の育成、さらに2001年の教科書問題を経て2002年W杯日韓共催から2003年盧武^{ノム ヒョン}鉉大統領誕生へと、韓国社会は大きく変動した。それにともなって変化する子どもたちの日本と日本文化への意識や行動の軌跡の調査を記録してきた。そのデータを手がかりに、本稿では今後の日韓両国が互いに理解しあうための教育上の新たな課題を考察したい。

その前提として、調査結果の概要を示しておきたい。まず1995年の調査開始時に、すでに日本漫画がリアルタイムで韓国青少年の日常に広く浸透し、初等学校→中学校→高等学校と成長とともに接触頻度や関心・意欲が高まることを確認した。また文化開放が始まった2000年での韓国社会の変化を、次の3種にまとめた。

- ①青少年の世界に日本文化がリアルタイムで広がる社会的基盤の成立
- ②青少年の日常経験と結びつく行動や文化のレベルでの日本と日本人に対する肯定的かつ積極的な興味や評価の上昇傾向
- ③日本文化開放施策が開放方法や進行度の問題とは別に、日本文化や日本人への拒否感を和らげる契機として機能

ところが、2001年2月実施の質問紙調査で日本へのイメージが大きくマイナスに転換した。いわゆる教科書問題の影響と考え、より詳細な調査を実施した結果、次のような日本批判の3種の層と、2種の問題点の指摘を把握した。

第一の層は経験に基づき日本を批判する中高年の男女(旧世代)。直接経験者の高齢者に加え、朝鮮戦争で荒廃した国土に生まれ、復興の厳しさとともに育った40～50代も含まれ、教科書問題に対してもっとも厳しく反応した層である。第二の層は経済成長とともに育った現在30代の男女。本来は旧世代と異なり日本文化に抵抗感はなく、教科書問題より自分の生活や子どもの進学を優先させる層だが、親類縁者から過去の苦難を当事者の情感をもって直接感得できた世代のため、マスコミ報道にともない子ども時代に獲得した知識と感情のセットがよみがえる。第三の層は急激に普及したインターネットの世界から学ぶ10～20代の男女(N世代)。PCを自在に操作する中学生を典型に、もっとも新しい世代がインターネットを介しもっとも古い世代の経験に基づく知識と感情を獲得。インターネットの普及がハングルによる閉じた言語空間の密度を高め、旧来の日本批判を再生産する新たな社会過程が形成されつつあることを把握した。他方このような日本批判に対し、a)感情的になっはならない、b)韓国の教科書にも問題がある、との指摘がなされていることも確認した。

さらに、この新たな社会過程をより詳細に把握するために、①これまでの継続調査に加えて、②日本理解・批判に関係する多様な学習機会の青少年への影響とその社会的文化的基盤の解明、③韓日相互理解教育のプログラムの開発という新たな観点から調査研究を進めた結果、日本と日本人への評価が2002年W杯日韓共催を契機に大きく好転したことを確認した。だが同時に、韓国青少年の自己形成過程において、日本の子どもや若者と同質の問題が生じていることを把握する一方で、両国の相互理解をはばむ新たな障壁が形成されつつあることも明確になった。以下この点について調査結果とともに紹介したい。

2. 日韓青少年が共有する自己形成過程の問題

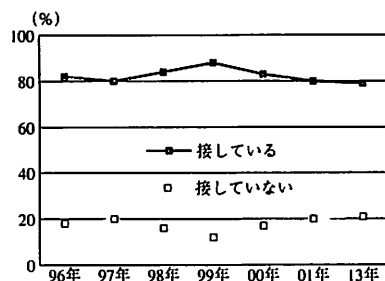
まず2003年調査(初等学校6年、中学校3年、高等学校2年対象)から、現在の韓国社会で育つ青少年の特徴を示すデータを紹介したい。

- ①長男が71%、長女が64%、平均家族成員数は約4人→核家族化
- ②69%が自分の部屋を保持→個室文化の形成
- ③初等学校6年の57.3%が専門塾（英・数・論述）に通う→学校化社会
- ④42%が自分専用のパソコンを持ち、専用はないが家にはあるのが54.5%
- ⑤インターネットを78%が宿題のために毎日利用→高度情報化

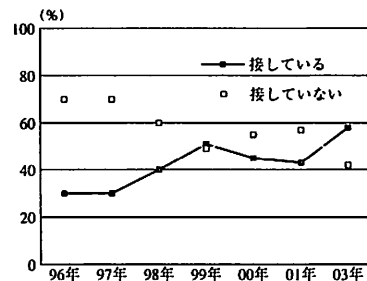
以上のデータは、韓国の子どもたちが日本と同様に、祖父母とは同居せず、兄弟姉妹も少なく、家庭の自分の部屋と学校の教室と塾を往復する（だけという）生活の中で自己形成をせざるをえないことを示す。この社会的条件は日常生活における人間関係の単純化による社会性の未成熟さにつながる。さらにこの傾向を日本の子どもたち以上に促進させるのがインターネットの高い利用率。情報化の波はハード、ソフト双方において日本よりも大きい。インターネットはサイバー空間を介したバーチャルな関係の拡大を可能にするが、他者と直接対峙したコミュニケーションで形成される社会的世界を縮小させる。

いずれの数値も韓国青少年が日本と同等もしくはそれ以上に「個人化」が進行した“豊かな社会”に育っていることを示す。だがそれは社会的自立のための新たな課題を両国青少年が共有することでもある。その彼ら彼女らがともに受容しているのが日本の漫画やアニメである。韓国と日本の青少年は、社会的条件だけではなく取得する情報もまた共有する。そこでその特徴を、初等学校5 or 6年生、中学校2 or 3年生、高等学校2年生を対象に、1995年から実施してきた日本文化への接触状況に関する継続調査の結果から紹介したい。

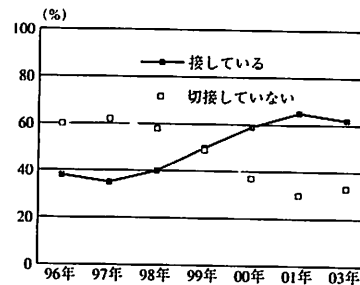
3. 日本文化の日常化がもたらす新たな課題



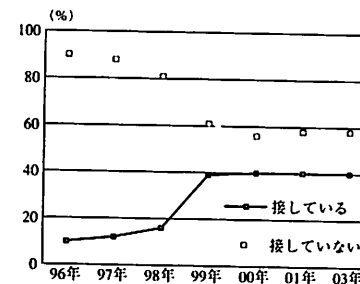
グラフ1 日本の翻訳漫画



グラフ2 日本の大衆歌謡



グラフ3 日本の衛星放送



グラフ4 インターネットによる日本文化摂取

グラフ1～4は1996～2001、2003年の各年にソウル市、大田^{ラジョン}市、釜山^{プサン}市、春川^{チュンチュン}市（1996年のみ）、光州^{クワンジュ}市で初中高生約2500名対象に実施した調査結果から、日常的に日本文化に「接している者」と「接していない者」の割合の変化を示したものである。

まず、社会状況の変化や文化開放政策にかかわらず浸透していることを示すのがグラフ1「日本の翻訳漫画」である。1996年時点から接触者は8割を超え、その後も若干の増減はあるが8割前後を維持している。1998年の金大中大統領就任後に開始される日本文化開放以前から、日本漫画が韓国青少年の手にわたるシステムが完成していたことを示すデータである。同時にそれは日本漫画を見て育った青少年がすでに韓国社会を担う世代になり、韓国の現代文化産業が育成される過程でもあった。現在、「韓流」との総称で日本も含め東アジア全体に広がる韓国文化の形成に、違法コピー期も含めた長年にわたる日本漫画の翻訳・出版が寄与していることを指摘したい。その象徴が、日本の少女マンガとともに育った最初の世代である40代から50代の日本女性が、韓国テレビドラマに共感することによって生じた「ヨン様ブーム」と考える。

他方、文化開放によって拡大したことを示すのがグラフ2「日本の大衆歌謡」である。1996年では29%であった接触者割合が、開放政策が発表された1998年に37.9%、1999年には49.7%になる。その後、教科書問題で開放が延期されたことを反映して減少するが、W杯後の2003年に55.1%と5割を超える。ただし、実は文化開放は分野によって異なり、Jポップや日本歌謡の開放は2004年1月からである。したがって、この図のグラフが示すデータの音源はすべて違法コピーかインターネットや日本から直接持ち込まれたCDやテー

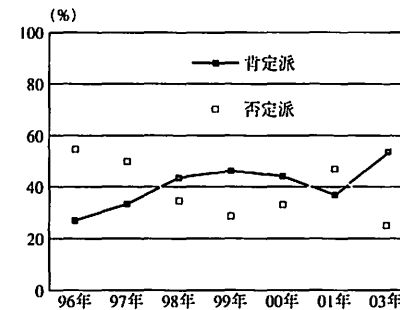
ブである。それにもかかわらず1998年から上昇傾向にあるということは、日本文化開放政策が商品としての日本文化の流入ではなく、韓国の社会と文化に根強く残る日本とその文化への抵抗感を和らげる機能を果たしていることを示唆する。

グラフ3「日本の衛星放送」の場合はどうか。調査開始時の1990年代半ばでは、衛星放送の視聴者が拡大し、高層アパートに取り付けられた窓のパラボラアンテナがステータスシンボルと化した。だがケーブルテレビの普及による多チャンネル時代を迎えて、需要は急減した。また2004年より大衆歌謡とともにケーブルテレビによる日本ドラマの提供が許可されたが、映画専門のマイナーチャンネルで作品も古く、現時点での視聴率は低い。「冬のソナタ」に始まる日本の「韓流ブーム」とは対比的に、もっとも日常的な情報媒体であるテレビによる日本文化接触の機会は、文化開放実施後も拡大していない。この点は今後の課題で改めて取り上げたい。

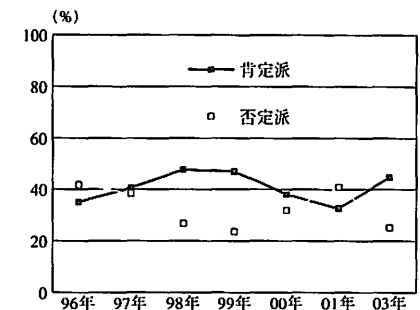
上記3種と異なる傾向を示すのがグラフ4「インターネットによる日本文化接触」である。日本文化開放決定を契機に増加したかに見えたが、1999年をピークに4割前後で止まっている。現在の韓国が世界でもっともIT化の進んだ社会であり、中高生が日常的にインターネットを活用していることを紹介した。だが、インターネットによる日本文化接触割合は停滞したままである。この事実が示唆する意味は重い。先に2001年の教科書問題に関する調査結果から、急激に高まった日本批判の背後に、インターネットサイトによる情報交換があったことを指摘した。この威力は、2002年W杯での韓国チームを応援するレッドデビルスの拡大や盧武鉉大統領誕生でも確認された。いずれも韓国社会内部の情報伝達と世論形成に、インターネットが巨大な力を発揮することを証明する社会現象であった。しかしそれは、ボーダレス時代の象徴とみなされるインターネットが、逆に言語と文化を共有するドメスティックな世界を強化し、異文化との相互理解をはばむ壁を高くするインフラになる可能性を示唆している。

この点も今後の課題とかかわって再度考察したいが、その前に、日本文化受容調査と同一質問紙上で実施した中高生対象の「日本と日本人への評価」(26項目)に関する意識調査の結果から4項目を選んで紹介したい。

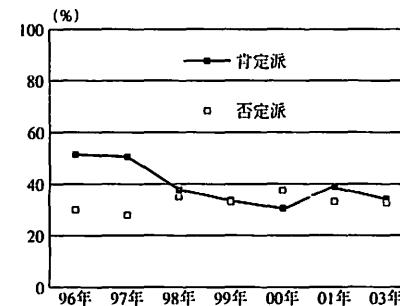
4. 日本・日本人への評価の特徴



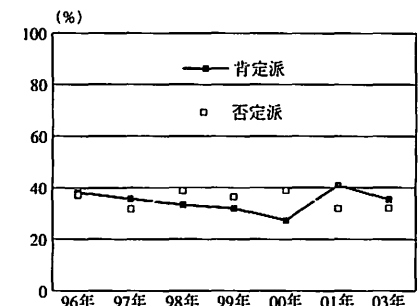
グラフ5 日本人と友達になりたい



グラフ6 両国の関係を良くするために努力したい



グラフ7 日本人に対して敵対感を感じる



グラフ8 理解できない不可解な国

グラフ5～8は各質問への〔肯定派（そう思う＋どちらかといえばそう思う）〕と〔否定派（そう思わない＋どちらかといえばそう思わない）〕の変化を示したものである。まずグラフ5「日本人と友達になりたい」とグラフ6「両国の関係をよくするために努力したい」は1999年に向けて肯定派が否定派を超えたが、2001年に反転して否定派が多数派になり、2003年に再び肯定派が否定派を上回る。日本文化接触割合と同様に、1998年（経済危機後の金大中政権による日本文化開放政策）、2001年（教科書問題）、2002年（W杯共催）という韓国社会の変化に対応している。この二つはともに日本と日本人を評価し、友好関係を積極的に求める内容である。その肯定派が5割前後まで上がるということは、韓国

中高校生の日本への関心の高さを示すが、その増減の激しさの意味は何か。

過去の歴史を理由に両国の交流促進の困難さを指摘する意見は少なくない。だが本調査対象の中高校生はその歴史の体験者ではない。生活環境は日本の同世代と変わらず、日本文化が組み込まれた生活を享受する世代でもある。それにもかかわらず日本への評価が大きく変化することは、韓国社会に潜在する日本への不信感の根強さを示すが、より重要なことは、その不信感の発現が日本側のあり方にかかわっていることである。ある時点で交流が進んだように見えても、日本側が努力を怠れば、韓国側の努力がそのまま不信感に転化し、相互理解をはばむ意識をかえって高める。この社会意識の構造が日本文化の拡大とは異なるレベルで存在することを忘れてはならない。

日本を批判的に見るグラフ7「日本人に対して敵対感を感じる」、グラフ8「理解できない不可解な国」はどうか。「敵対感」は1996～97年の時点では肯定派が多かったが、その後肯定派と否定派が30%から40%の間で推移し、2003年では差がなくなる。「不可解な国」も2003年の調査では肯定派と否定派が30%から40%の間で拮抗状態にある。それは肯定と否定そして「どちらともいえない」が3等分されていることを示す。その意味は何か。1990年代前半に訪問した学校で、私は過去の日本の行為を厳しく追求する中高校生と繰り返し語り合った。その経験と比較して10年の年月をへて積極的に日本を批判する人が3割にまで減少し、相互理解の基盤が培われていると評価すべきか。逆に3割の中高校生が今なお日本への拒否感を持つことを強調すべきか。その答えは今後の相互理解教育のあり方で決まると考えたい。韓国と日本の関係は本調査を開始した1990年代前半と比較するだけでも、政治・経済・文化のいずれの分野においても深まっている。だが同時に新たな障壁も生じている。この二つの変化をより明確にするために2003年の調査で実施した新たな調査項目の分析結果を紹介したい。

5. 交流促進の新たな障壁

次頁の表の左の欄は、先に紹介した韓国の中高校生の「日本と日本人への評価」に関する2003年度の調査結果の全項目を肯定度（そう思う+どちらかとい

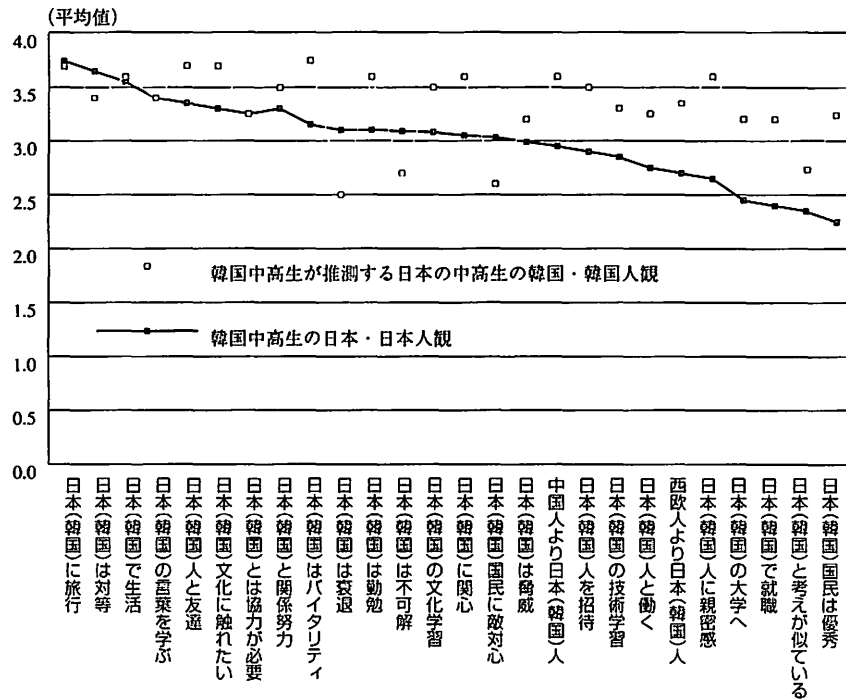
えばそう思う）の高い順に並べたものである。また右の欄は同じ中高校生が「推測する日本の同世代が韓国と韓国人に対する評価」を質問した結果を肯定度順に示したものである。いずれも「日本と日本人への評価」に対応した内容である。

韓国中高校生の日本・日本人観
韓国中高校生の推測する同年齢の日本人の韓国・韓国人観

平均値			平均値		
Q7	15) 日本に旅行に行きたい	3.72	Q8	1) 韓国はバイタリティーがあり、発展する国と 思っている	3.70
Q7	9) 韓国は将来日本と対等になる	3.64	Q8	15) 韓国に旅行に行きたいと思っている	3.67
Q7	18) 日本でしばらく生活してみたい	3.54	Q8	26) 日本文化や漫画・歌謡などに自由に接したい と思っている	3.66
Q7	22) 日本語を勉強したい	3.42	Q8	19) 韓国人と友達になりたい	3.65
Q7	10) 日本人と友達になりたい	3.38	Q8	7) 勤勉で優れた資質を持った国民であると思っ ている	3.61
Q7	26) 日本文化や漫画歌謡などに自由に 接したい	3.36	Q8	18) 韓国でしばらく生活してみたい	3.59
Q7	4) 韓国が発展するために協力し合わ なければならない国	3.24	Q8	10) 韓国国民に対して親密感を感じる	3.58
Q7	23) 韓国と日本の関係をよくするため 努力したい	3.23	Q8	14) 中国人より韓国人が好きだと思っている	3.58
Q7	1) 国民にバイタリティーがあり、発 展する可能性のある国	3.11	Q8	12) 韓国や韓国人に対して強い関心を持ってい ると思っている	3.57
Q7	2) 次第に衰退し国力が弱くなるだろう	3.10	Q8	24) 韓国の文化を学びたいと思っている	3.50
Q7	7) 勤勉で多方面にわたり優れた資質 を持った国民である	3.10	Q8	20) 韓国人を家に招待したいと思っている	3.49
Q7	6) 何をしているのか理解できない不 可解な国	3.08	Q8	23) 韓国と日本の関係をよくするため努力したい と思っている	3.49
Q7	24) 日本の文化を学びたい	3.08	Q8	22) 韓国語を勉強したい	3.43
Q7	12) 日本や日本人に対して強い関心を持 っている	3.06	Q8	9) 韓国は将来日本と対等になる	3.41
Q7	11) 日本国民に対して敵対心を感じる	3.05	Q8	13) 西欧人より韓国人が好きだと思っている	3.36
Q7	3) 将来韓国の存在を脅かす国	2.98	Q8	25) 韓国の技術を学びたいと思っている	3.30
Q7	14) 中国人より日本人が好きだ	2.97	Q8	21) 韓国人と一緒に仕事がしたいと思っている	3.25
Q7	20) 日本人を家に招待したい	2.94	Q8	8) 韓国国民の才能は日本国民よりも優れている と思っている	3.24
Q7	25) 日本の技術を学びたい	2.89	Q8	4) 日本の発展には協力し合わねばならないと 思っている	3.21
Q7	21) 日本人と一緒に仕事がしたい	2.77	Q8	16) 韓国の大学や大学院に行きたいと思っている	3.19
Q7	13) 西欧人より日本人が好きだ	2.76	Q8	17) 韓国の企業に就職して働きたいと思っている	3.19
Q7	10) 日本国民に対して親密感を感じる	2.65	Q8	3) 韓国は将来日本の存在を脅かす国と 思っている	3.15
Q7	16) 日本の大学や大学院に行きたい	2.46	Q8	5) 国民の考え方や価値観が日本人と似てい ると思っている	2.78
Q7	17) 日本の企業に就職して働きたい	2.39	Q8	6) 韓国は理解できない不可解な国と思っ ている	2.66
Q7	5) 一般的に国民の考え方や価値観が 韓国人と似ている	2.34	Q8	11) 韓国国民に対して敵対心を感じると思っ ている	2.60
Q7	8) 日本国民の才能は韓国国民よりも 優れている	2.22	Q8	2) 韓国は次第に衰退し国力が弱まると 思っている	2.49

さらにこの韓国中高生による「日本と日本人への評価」と「推測する日本の同世代の韓国と韓国人への評価」の肯定度を比較するために、各項目の平均値を析出して各欄の右端に記載し、それを折れ線グラフで示したのがグラフ9である。

グラフ9 韓国中高生の日本・日本人（推測、韓国・韓国人）観



まず韓国中高生の「日本と日本人への評価」よりも「推測する日本の同世代の韓国と韓国人への評価」の平均値が低い項目を見ると、「韓国と日本は将来対等」「韓国不可解な国」「韓国国民に敵対心」「韓国将来衰退」の四つである。いずれも韓国を批判的に見る内容である。平均値が低いのは、肯定よりも否定する割合が高いことを意味する。また、韓国中高生が「推測する日本の同世代の韓国と韓国人への評価」とは日本の同世代を介した自国認識とみなせる。

したがって、この4項目は、韓国中高生が自分たちの日本に対する評価(批判)ほどには、日本の同世代は韓国に対し批判的ではないと思っていることを示す。このことは、韓国を肯定的に評価する他の21項目すべての平均値

が、韓国中高生の「日本と日本人への評価」の平均値より高いことから確認できる。

すなわち、韓国の中高校生は、韓国が日本より上位もしくは同等にあることを前提に、日本の同世代の韓国・韓国人観を推測しているわけである。

一般に日本では、韓国人の日本への関心の高さに比較して、日本人の韓国への関心の低さが問題にされる。だが韓国の中高校生は、自分たちよりも日本の同世代の方が韓国に対してより強い関心を持ち、しかも韓国を肯定的あるいは日本よりも上位に位置づけていると推測している。このことは両国の相互理解教育に新たな課題をもたらす。さまざまな比較調査で、日本の中高生の韓国への関心度は韓国中高生の日本への関心度よりも低く、自国を韓国より下位にみなす日本の中高生は少ないことが確認されているからである。韓国と日本の中高生の間にある距離(差異)は、ここにあらわれた数値以上に大きいといわざるをえない。

私はこの10年、両国の子どもや若者が現代文化を共有していることに注目し、新たな「共感の帯」が築かれることを願って調査研究を続けてきた。その結果、日本文化開放という追い風を受けて、韓国と日本の青少年がリアルタイムで文化を共有できる社会的基盤が確実に形成されてきていることを明らかにした。日本への肯定感が高まる傾向も把握できた。だが他方で、インターネットが新たな障壁となりうることも見出した。そして、この日本の同世代を介した自国認識の推測との対比による韓国中高生の日本と日本人への評価の特徴から、単に現代文化を共有するだけでは埋まらない認識のズレがある(生まれている?)ことを指摘せざるをえない。なぜこのようなことが生じたのか。

これまでの調査結果の総合分析から出した結論は、韓国中高生の生活の豊かさと日本の現代文化の日常化が重なることで生じた現象ということである。韓国が貧しい社会であれば、日本の漫画に描かれた豊かな社会の描写は未知の国へのあこがれを生む。ハリウッド映画や米国のテレビ番組に登場する家庭にあこがれたかつての日本の若者のように。だが現在の米国の映画や番組に病める大国の問題を見出すことはあっても、日本の未来を夢見る日本人は少ない。韓国の青少年もまた同様の情報を日本の現代文化から読み取っていないか。

私はかつて日本の漫画文化は、「豊かな社会」に育つ子どもたちにとって、

“男の子”が“男性”に、“女の子”が“女性”へと成長する過程での「もうひとつの教科書」の役割をになっていることを解明した（『なぜ子どもは「少年ジャンプ」が好きなのか』明治図書）。他方、先に日本翻訳漫画の接触頻度が初等→中学→高校の順に増加していることを紹介した。それは現在の韓国社会で育つ子どもたちの成長過程に、日本文化が根づいていることを示している。

私はこの点に注目し、日本の女子中高生の高い支持を得る矢沢あい漫画『NANA』の日本語版と韓国語版の比較から、韓国の若い女性の世界にも日本と同様の変化が生じていることを指摘した（『韓国における日本大衆文化についての調査研究（6）』、『静岡大学教育学部研究報告人文社会科学篇 53号』）。ただし、矢沢あい漫画『NANA』の世界の魅力は、家族や男性からの自立を求めて恋人との離別を繰り返しながら迷い悩む女性の内面の葛藤の描写のリアルさである。そしてそれはあくまで現代日本社会で育つ女性にとってのリアリティである。そこにはかつての「健全な男女の愛」に支えられた家庭は存在しない。

韓国の中高生が日本の女性と同様に、自立へのモデルを『NANA』の世界に見出したとしても、それはあくまで憧れの次元。今なお家族の絆が強固な韓国の家庭に育った彼女たちにとって、豊かな日本の影の方にリアルさを感じるのではない。他方、繰り返し指摘してきたように、韓国中高生が日常実感する生活世界のレベルで日本より劣るものはないと判断しても不思議ではない。現代日本のリアルな影を知った中高生が、自分の豊かな日常と比較して、自国を日本より上位におくこともまたリアルな認識である。

問題は自国を上位に見ることではない。日米の関係でも、類似した調査をすれば、両国の中高生がともに自国を上位に位置づけることが予測される。だが、韓国と日本の間には過去の歴史という壁が存在する。この旧来の壁によって韓国社会の基層に形成された日本への批判や不信を醸成する構造が、韓国中高生の自国認識と日本認識の差異（ズレ）を増幅させ、日本からの不用意な情報にそれを顕在化させる可能性もまた本調査によって確認した。

したがって、7度の継続調査と2003年度の新調査から見出した韓国中高生の自国認識と日本認識の特徴は、それがいかに韓国と日本の実像とズレたものであったとしても、一定の社会的基盤に基づく生活実感と学校教育やメディアによる情報が結びついた現実として構築されていることを指摘しなければならな

い。ただし、それは韓国と日本双方の既存世代に見出される、過去の経験や記憶に基づく劣等感や優越感あるいは拒否感や贖罪感と結合した自国認識や自尊心とは異なる意識であることも強調しておきたい。

6. 相互理解教育の新たな課題

改めてこれまでの分析を要約すると、まず韓国青少年の間に日本の現代文化が広く共有され、日本と日本人や日本文化への距離が縮小していることを確認した。しかし同時に、過去の歴史に起因する日韓両国の相互理解をはばむ構造が、社会的基盤においても、意識の基層においても再生産されていることを明らかにした。さらに、新たな障壁も見出した。

このような分析結果を前にして、両国青少年の相互理解を促進するためには、旧来の方法だけでなく、より積極的な学習と教育の方法を考案し、計画し、実践することが必要との結論にいたった。そしてその具体化のために、現在、韓国の初等学校や中学校の先生方の協力を得てモデル授業を考案中である。その実践過程において、韓国の先生方と共有するようになった問題意識を今後の相互理解教育を展望するための新たな課題として提示したい。

（1）インターネットを代表に、IT化の進行によって生じる問題の実証研究と相互理解促進のためのメディアリテラシーの育成や情報サイトの増設

韓国は経済危機をバネに日本を超えるIT大国に生まれ変わった。本調査でも青少年のインターネット活用が日常化していることを確認した。一般に、高度情報化の問題点として、情報のグローバル化を「明」とすれば、サイバー空間におけるバーチャルリアリティ（仮想現実）の影響や直接経験の不足が「暗」とされる。だが本調査結果から「明」の部分にこそもっとも重要な問題点があることが明らかになった。インターネットの拡大は、異文化間における相互理解の拡大に直接に結びつかないだけでなく、新たな壁にもなる。インターネットは多量の情報を瞬時に多数の人が交換できるようにしたが、それは情報を理解し操作する言語と文化を共有する者としいない者との間の差異の拡大とセットである。その結果、インターネットの情報交換の威力が大きければ大

きいほど、異文化間の理解をはばむ壁は高くなる。この矛盾は、世界のすべての人たちが言語と文化を共有する時代が来ないかぎり再生産される。

そしてこの課題の困難さは、時間の流れを逆転できない以上、インターネットの活用を制限することで解決できないことにある。また言語と文化の共有を求めることで解決できない。それは不可能だけでなく、望んではならない。問題の解決とともに固有の言語と文化が失われるからである。必要なのは日常的に活用することを前提に、異文化間の相互理解をはばむ要因とその克服方法を明らかにすることである。そのためにまず取り掛かるべきことは、相互の理解（誤解、不信）にかかわる多様な情報サイトの影響についての実証的研究である。そしてその成果をふまえて、誰もが情報発信者にも受容者にもなりうる時代と社会に応じた新たな情報活用能力（メディアリテラシー）の育成と、それを統御するための社会的ルールの創造と学習方法の研究である。

たとえば、メール、掲示板、チャットを代表に、インターネットによる情報は、日常的な口語の世界に満ちている。その意味で、新たな言語文化の世界が生まれているといえよう。だが本来、口語は話者との対面を前提に形成されてきた。他方、インターネットは匿名の世界である。このズレを補う解釈能力と社会的ルールの共有化が早急に求められる。韓国教育部が、急激なインターネットの普及によって子どもたちの間に生じた問題群に対処するために、初等学校や中学校での研究校を設けて進める ICT（情報コミュニケーション技術）教育の研究と実践は、その有力な試みとして参考になる。

さらにより積極的に、相互の変化する状況を、その理解のズレに関する情報とともに、リアルタイムで提供しあう情報サイトを設ける必要がある。特に、調査で明らかにしたように、障壁の再生産の原因の多くは日本側にある以上、韓国語による日本メディアや公的機関の情報サイトの増設が急務である。少なくとも、韓国の三大新聞（朝鮮日報、中央日報、東亜日報）が日本語サイトを設けて主要記事を毎日更新している以上、日本の三大新聞もまた（朝日新聞、読売新聞、毎日新聞）もまた韓国語サイト開設を急ぐべきである。

（２）文化のグローバル化による認識と評価のズレに関する実証研究と両国文化を共有する機会の拡大

韓国に日本の現代文化がリアルタイムで流入していることは確認した。しかし、そのことが相互理解に必ずしも結びつかないことも明らかになった。特に大衆文化とみなされる商品は、口語と同様にそれを生み出した社会と文化の特性に規定される度合いが高い。たとえば、日本の漫画はあくまで日本の読者を対象に描かれている。吹き出しの中の言語は翻訳できても、それを語る者の表情やしぐさの絵、背景の絵、コマの大きさや並び方など漫画固有の表現様式は翻訳できない。それらはすべて読者に内在する解釈枠（コード）という文化に規定される。異文化の世界で意図せざる情報を読み取られる可能性は高い。現代文化の国境を越える共有化の進行は、相互理解の基盤形成への寄与と同時に、読み取る側に評価をともなった意図せざる差異の認識を固定化させる側面を無視できない。だがここでも規制ではなく、より積極かつ多面的な現代文化の共有によってしか問題を解決できないと考える。かつて日本文化が禁止されていた韓国において、日本の漫画が粗雑な翻訳（誤訳）と、絵の左右が逆になった海賊版によって広がることで、日本人はすべて左利きといった誤った認識をもたらした。文化の政治的な統制は誤解の拡大再生産を生む。

その意味で、もっとも日常的なメディアであるテレビにおける日本文化開放の拡大をもとめたい。それもマイナーなケーブル局ではなく、KBS を代表とする韓国のキー局において。もちろん私は開放を躊躇する韓国の人々の感情を理解する。だが日本の中年女性の韓国観を急激に転換させた日本の「韓流」ブームが NHK による「冬のソナタ」のテレビ放映から始まったことを考えるなら、韓国の NHK に相当する KBS での日本文化開放を願わざるをえない。加えて、中年女性に先んじて子どもたちの韓国観の変化が BoA やユン・ソナのテレビ番組での活躍によって生じていたことを指摘しておきたい。また、このことと関連して、日本のキー局においてもまた特定の韓国ドラマやグルメ旅行だけでなく、韓国の今をリアルかつ多面的に知らせる番組の紹介やプロデュースを期待したい。

(3) 世代間対立や二国間対立を超えるアジア的シチズンシップの構築と問題解決過程を共有する機会の制度化

東アジア各国の急激な経済成長は国内の世代差を拡大させる。韓国においても既存世代とは異なる新たな相互理解の壁が青少年の間に生まれている。新たな壁を除くには新たな方法が必要である。歴史認識に代表される旧来の枠組みを超えた教育と学習の機会、特に日韓両国の学校教育の再検討を求めたい。

過去の歴史を対立する立場で経験した両国の既存世代にとって、歴史認識の問題は避けて通れない課題である。だが解放後 60 年を経て、同じ目の高さで互いを見ることができるようになった新たな韓国人と日本人が育っている事実の重みを再確認したい。彼ら彼女らは東アジアという舞台で生じる大競争時代をライバルとして生きる男女である。さらにより重要なことは、日本で少子高齢化と称される出生率の低下と高齢化率の上昇を代表に、急激な工業化と情報化によって生じる東アジアの伝統的な社会システムの変動がもたらす問題の解決を、ともに担わなければならない世代でもある。その意味で、未来の利害を自国の旧世代よりも共有しあう関係にあることを忘れてはならない。

すでに韓国の女子学生が新たな自立のモデルを求めて、かつての韓国では想像できない過激な性描写が含まれる日本の少女マンガ『NANA』の読者になっていることを紹介した。さらに経済の変化は早い。EU を視野に日中韓三国に ASEAN 諸国を加えた東アジア共同体さえ構想されている。そのために、互いの国と民の相違を認め合うだけでなく、修正をも要求しあうことを通じて、共有する人と世界の拡大を志向するアジア的シチズンシップとその教育システムの構築が求められ始めた。だが、日韓両国の学校の変化は遅い。

早急に両国の教育課程全体を相互に理解する努力と教員の交換を含む教員研修の共同実施が必要である。日本の学校での韓国語（文化）の教育機会の拡大や韓国の日本語（文化）教育への日本の教育機関の参加制度を設けることも重要である。何よりも現代文化を共有する両国の新たな世代が、相互の類似と差異を知り学び合うことを通じて、互いの問題とその解決への努力を共有できる機会を恒常的に可能にする制度の構築が、今後の相互理解教育促進のための最重要課題とされなければならない。

7. 新たな対立の時代を迎えて

本年は国交正常化から 40 年を記念した「日韓友情年」として、数多くの行事が準備されている。実は上記の課題の原案は、その友情年を記念して 3 月 13 日にソウルで開催された「韓日友情の年記念韓日シンポジウム——韓日青少年交流の課題と展望」（東アジア文化交流協会主催）のために準備したものである。会場にはインターネットサイトに日本文化研究サークルのホームページを開設する韓国の大学生が 100 人以上集い、友情年の幕開けにふさわしい出会いの場となった。だがその会場の外では大きな変化が生じていた。いうまでもなく、島根県議会の「竹島の日」制定を契機に再燃した日本名「竹島」、韓国名「独島」をめぐる領土問題と文部科学省による中学校教科書検定結果の発表が重なることで、再び日本への批判の声と行動が顕在化していたからである。しかも、帰国した私のもとに届く韓国の友人のメールはかつて経験したことない厳しい現実を伝えるものであった。不幸にも本稿で指摘した新旧の壁の存在を再確認することになった。同時に 2004 年以降の韓国の政治的・経済的・社会的な新たな変化の重さを確認することでもあった。いいかえれば、今回の教科書問題は従来とは異なる新たな状況のもとで生じた現象といわざるをえない。

まず政治的には両国とも戦後政治を担った人たちが退場した後のリーダーによって意思決定がなされていることである。特に盧武鉉政権を支える「386 世代」（現在 30 代、80 年代に学生運動に参加、60 年代生まれ）は、日本の高度成長をモデルに経済を復興させた朴正熙大統領とその後継者の批判にアイデンティティを持つ人々たちである。そのため政権発足時から大韓民国成立時に遡って政権の正統性を問題視する一方で、日帝（日本統治）時代の協力者（親日派）の追及を政治課題にした。その批判の刃が日本に向かうことは予測された。

それを助長したのが中国経済の巨大化と日本の経済力の低下である。1997 年危機を IT 化で克服した韓国経済への自信と重なり、韓国の新たなリーダーが日米以外の選択肢を持つことも予測された。さらに彼らを支えるインターネット世代が自国を日本より上位に見る傾向は先に指摘した。これが社会的な変化である。それを象徴する経験を紹介したい。昨年 10 月訪問した中学校で

日本の韓流ブームをどう思うか聞いたところ、「私たちが日本の漫画を好きなように、韓国文化を日本人が好きになるのは当たり前です」との答えが返ってきた。日本の「韓流ブーム」は自国優位を確認したにすぎないわけである。

だがこのような自国認識に問題があることは先に指摘した。さらに政治リーダーも含めて、韓国の人たちが日本との友好を拒否しているわけではない。むしろ韓国の友人からのメールは、批判する人たちもまた解決方法を見出せず自縄自縛の状態にあることを教えてくれる。それを示唆するのが「責任は日本の側にある」との盧武鉉大統領の言葉である。加害と被害のみでなく利害調整の場をも日本と共有した旧世代と異なり、歴史的正当性と倫理的正当感でしか対処できない世代には、日本の変化以外に解決の方向を見出せないからである。

このような日本批判に対し韓国の国内問題として冷めるのを待つしかないとの意見が日本にある。だがそのような判断が新たな世代の不信感を拡大させたことを忘れてはならない。では韓国の期待通りに教科書を変えるべきか。これも問題の先送りである。誤解を恐れずにいえば、これまでの日本側の加害性の強調は、隣国の被害を日本国内の政治的対立に利用する側面があったと思わざるをえないからである。私は過去の加害性の責任は日本批判の背後にある隣国の“現在と未来”の問題解決を視野に置く発言と行動で果たすべきと考える。その意味で韓国がもっとも批判する教科書もまた自国内の対立の産物にすぎない。

どんなに批判されたとしても、互いの相違点を提示し理解し合える道を求めるしかない。非難することでも無視することでもなく、彼ら彼女らが生きる世界を内在的に理解することから始めるべきである。その方法を自らの思考と行動にも向け、相手が理解可能な表現様式で伝えなければならない。何よりもその作業を相手国の中に入っていくべきである。その先駆的モデルこそ、本書作成にいたる谷川先生と大学院生による韓国の高等学校での授業実践である。

改めて本書の内容を知り、問題解決の糸口が無数にあることを発見した。だが残念なのは本書が実践の終了を前提にまとめられていること。問題は韓国だけではない。互いに妥協することが困難と思われる政治的、経済的、社会的対立は東アジア全体に広がる。谷川先生が開いた道は、この新たな状況に抗して相互理解教育を進めるためにこそ必要だからである。より広い国と民とのネットワークに基づく実践の再開を心から願うものである。

日韓の期待される人間像を追究する力から

南 景熙 (ソウル教育大学校)

はじめに

韓日両国は、21世紀にそなえて新しい教育改革とそれにとまなう教育課程を改編し、韓国は2000年より、また日本は2002年より施行している。21世紀社会は、情報化、国際化社会として位置づけられ、このような社会では新たな知的価値を創造できる人間形成が重視されている。教育問題を取り扱う場合のもっとも重要な課題は、教育を通じて育てるべき人間像を定立することであり、教育制度や教育政策、もしくは教育内容や教授方法は、このような人間像を定立するための手段になる道具ともいえる。このような人間像を実現するために、新教育課程において、韓国と日本はそれぞれ期待される人間像を追究する力を提示している。

韓国は、教育改革委員会の1995年5月31日教育改革案¹⁾に含まれていた初・中等学校教育課程改革法案を具体化し、1997年3月5日、「教育課程2000」と称される第7次教育課程総論案を発表した。また、同年12月30日、2000年から段階的に適用される初・中等学校第7次教育課程を確定・告示した。学習者中心の教育課程、水準別教育課程と特徴づけられる第7次教育課程では、児童・生徒が養うべき力として「自己主導力」を、社会科教育の目標で育成すべき資質として「市民的資質」を掲げて強調している。

日本は、第15期中央教育審議会（以下、「中教審」）で、1996年7月19日、「21世紀を展望した日本教育の理想に関して」と題する第1次報告書を、また1997年6月9日、第2次報告書を発表した。この報告書では、児童・生徒が養うべき力として「生きる力」を、社会科教育の目標で育成すべき資質として「公民的資質」を掲げて強調している。

未来社会は、知識情報の急激な膨張、科学技術の非常に早い発達、国家間門

目 次

日韓交流授業と社会科教育

序文	李元淳	3
日韓交流授業の挑戦	谷川彰英	13
1. “冬ソナ”ブームと「竹島」問題 2. 1981～82年の教科書問題 3. 教科書問題を超えて 4. 「授業」で勝負する！ 5. 日韓交流授業でねらったもの 6. 交流授業の内容とメッセージ		
第1部 日韓歴史授業への挑戦		
朝鮮通信使と日本——江戸時代の民間交流——		35
1. なぜ朝鮮通信使か 2. 「朝鮮通信使来朝図」に見る日本人 3. 書を求める日本人 4. 今も残る朝鮮通信使の文化 5. 生徒の感想 6. 通信使から学ぶこと		
善隣友好の歴史に学ぶ——雨森芳洲と「誠信」外交——		43
1. 授業づくりの社会的前提と私たちのねがい 2. 本授業におけるアピールポイント 3. 「誠信ノ交」とは 4. 雨森芳洲研究の現在		
忘憂里は語る——植民地時代に生きた浅川巧——		55
1. 忘憂里に眠る日本人 2. 「生まれながらの名前で呼びかける」 3. 浅川巧を扱う意義 4. 対話の始まり 5. 韓国の高校生の声		
陶磁器から見た東アジア		67
1. 「イマリ」 2. 日本における磁器の誕生 3. イマリの輸出されたのか 4. なぜイマリが輸出されたのか 5. ヨーロッパにおけるイマリの影響 6. 実際の授業 7. 日韓交流の課題		
千葉十七と安重根——近代史への挑戦——		76
1. 近代史への挑戦 2. 千葉十七と安重根 3. 「過去」「現在」から「未来」の日韓関係へ 4. 日韓交流の出発点		

民族の誇りとスポーツ選手の夢——ベルリン五輪サッカー——		88
1. 「サッカー」教材化の視角 2. 日韓サッカー交流史の「原点」 3. サッカー日本代表の「ベルリンの奇跡」 4. ベルリン五輪代表選考問題 5. 金容植と金永根の選択 6. 金容植から見たサッカーと戦後社会 7. 日韓サッカー交流の「未来」		
在日韓国・朝鮮人問題——対話の可能性——		98
1. 今なぜ在日韓国・朝鮮人問題か？ 2. 在日韓国・朝鮮人の形成過程 3. 国籍問題 4. 在日韓国・朝鮮人の学校選択 5. 在日韓国・朝鮮人の多様化 6. 「対話が必要である」		
【コラム】教科書問題と「正史」		107

第2部 現代社会をどう教えたか

日韓はキムチでつながる		113
1. キムチをどう位置づけるか？ 2. 韓国人が知らないキムチの世界 3. 漬物って、ナニ？ 4. キムチの歴史 5. 本場のキムチ・日本のキムチどう違う？ 6. データに見るキムチ 7. 「漬物」でなくなった？ キムチ 8. サッカーとキムチ		
「姓の変更」と「同姓不婚」——日本と韓国の婚姻制度——		124
1. 同じ姓を名乗ること 2. 韓国の夫婦別姓 3. 日本の姓と家 4. 守るべき「血統」と「家」 5. 現代の問題として		
外国人労働者と日本社会		131
1. 「見えないもの」を「見える」ように 2. 1997年までの「外国人労働者」 3. 1997年以降の「外国人労働者」 4. 学びは続く		

CM からさぐる日本経済	140
1. CM という教材 2. 「リゲイン」のテレビ CM	
3. 登場人物はサラリーマン 4. 景気変動の影響	
5. CM のヒットとドリンク剤市場 6. CM 授業の可能性	
音楽から “Global Issues” を考える	148
1. “Global Issues” と向き合うために！	
2. 共感と公共性について 3. 開かれた公共性と音楽	
4. “We Are The World” の活動の可能性	
5. 音楽から浮かび上がるメッセージ	
Lovely Whales —— 鯨問題でディベート ——	156
1. 捕鯨問題が伝えること 2. 韓国での捕鯨	
3. 捕鯨の授業化 4. 捕鯨問題の視点 5. 捕鯨を扱ってみて	
【コラム】韓国の米軍	167

第3部 日韓の文化を考える

唐辛子で見る日本と韓国の文化	173
1. なぜ唐辛子なのか？ 2. 似て非なる国の唐辛子	
3. 唐辛子の伝播 4. 朝鮮半島で歓迎された唐辛子	
5. 日本人と唐辛子 6. 文化の伝播と変容	
高校生の恋愛・結婚観に見る日本と韓国	184
1. 恋愛と結婚、その関心の高さ 2. 高校生の恋愛・結婚観	
3. 恋愛・結婚観と日韓の社会・文化的背景	
4. 恋愛・結婚観に関する授業の展開	
手塚治虫のメッセージ	
—— 「生命の尊厳」と人間の「生きがい」 ——	191
1. 手塚治虫の功績 2. 「情報の洪水に流されるな」	
3. 「生命の尊厳」 4. 「ふたりの黒い医者」	

5. 「生きがい」へのこだわり 6. 手塚治虫のメッセージ

映画に見る日韓の異同	202
1. なぜ「映画」か？ 2. 日韓映画事情	
3. 「Love Letter」の謎（？） 4. アンケートから見える「日本人」「韓国人」	
5. 「Love Letter」が教えてくれたもの	

第4部 韓国の教育制度（シンポジウムより）

韓国の学校教育と高校生	213
1. 韓国と日本 2. 韓国の戦後教育の変遷	
3. 韓国の教育の特徴 おわりに	
韓国の教科書制度を問う	224
はじめに 1. 韓国の教育改革政策と教科書の性格の変化	
2. 第7次教育課程による教科書編纂の方向	
3. 第7次教育課程による教科書編纂の問題点	
4. 教科書制度の改善と基本方向 おわりに	

第5部 日韓で社会科教育を考える

日韓の歴史教育交流の意義について	加藤 章 237
はじめに 1. 日本における歴史意識の変化	
2. 韓国現代史と歴史認識 3. 日韓歴史教育交流の展開	
東アジアの歴史教育の未来	二谷貞夫 248
—— 中国人民教育出版社刊教科書『歴史と社会』を見て ——	
はじめに 1. 中国の歴史教育改革の特徴：課程標準の登場	
2. 『歴史と社会』のねらいと歴史教育	
3. 東アジア共同体論と歴史教育のあり方	
まとめにかえて	

21 世紀のグローバル化時代における歴史教育のあり方

はじめに	1. 韓国歴史教育の問題点と課題	2. 日本の歴史教育の問題点と課題	3. 「日韓交流授業」実践（1995～2002 年）の歴史教育的な意義	おわりに	李 明熙	262
日韓相互理解教育の新たな課題	——韓国青少年への継続調査を手がかりに——				馬居政幸	274
	1. 10 年間の調査結果から	2. 日韓青少年が共有する自己形成過程の問題	3. 日本文化の日常化がもたらす新たな課題	4. 日本・日本人への評価の特徴	5. 交流促進の新たな障壁	6. 相互理解教育の新たな課題
	7. 新たな対立の時代を迎えて					
日韓の期待される人間像を追究する力から	はじめに				南 景熙	291
	1. 期待される人間像と教育課程	2. 期待される人間像を追究する力	おわりに			
日本と朝鮮半島の関係史年表					國分麻里	307
あとがき						315

日韓交流授業の挑戦

谷川彰英

1. “冬ソナ” ブームと「竹島」問題

2004 年は“冬ソナ” ブームにわいた年であった。中年以上の日本の女性が“ヨン様”に憧れ、韓流文化が一気に日本に流れこんできた。

その年の暮れに韓国を訪れた。期せずして韓国の研究者との間でこのブームについて激論になった。もともと、テレビ番組をろくに見ていない人間同士が激論するわけであるから、かなりの外れな議論であったに違いないのだが、一人は日本人と結婚して日本の大学で教えている方で、これはこれで大いに盛り上がった。彼は、ブームには抵抗感もあるが、韓国人としてこれだけ日本人が関心をよせてくれるのはうれしいと語った。私は、だいたい日韓関係の厳しさも知らずにただ“ヨン様” ブームに浮かれるのは許せないと強く語った。対する彼は、そういう日本男性の感覚がアジアに受け入れられていないのだと主張し、議論は 3 時間におよんだ。

たとえば悪いが、砂漠でシャボン玉をふくような冬ソナブームは、年が明けて島根県議会が 2 月 23 日に「竹島の日」制定の条例を提出したことによって、完全にシャットアウトされてしまった。私の予想した通りになった。韓国からは早速抗議の嵐が起り、教科書問題がまたもそれに拍車をかける結果になっている。結局また同じことを繰り返している。

私は後述するように、韓国の対応にも問題はありと考えているが、問題の根本は日本側の認識不足にある。まず多くの日本人は、なぜ「竹島」（韓国では「独島」^{ドクト}）ごとき無人島で韓国がそんなに騒ぐのか理解できない。そもそも竹島がどこにあるかも知らない。日本では竹島問題を教えていないし、韓国併合に関してもほんの 1 ページ程度ですませているのが中学校社会科の現状である。それに対して、韓国では 30 ページ近くを費やして植民地時代の歴史を教えて